

松江城の鯨瓦と鬼瓦（調査報告）

岡崎雄二郎

■ しゃち 鯨（瓦）について

1. 鯨とは何か

- ・古代中国では「螭吻」「鸱吻」「鸱尾」という。龍の9番目の子で、魚の形をした龍のうな神獣。火伏、火難除けの想像上の動物で屋根の両端に付けられた。
- ・日本では「鸱尾」として飛鳥・奈良時代の古代寺院に採用 例：山代郷北新造院跡（『出雲国風土記』に記載） 中世の寺院の厨子の屋根両端に付けられる 城郭建造物では安土城（天守かどうかは不明）が最初で、全国の城に広まっていった。
- ・胴体は魚、頭は龍 口には鋭い牙、背鰭や臀鰭の鋭い鰭骨を強調した「棘」、胴部の両横の真ん中に鰭を差し込むのが特徴である。

2. 文献史料に見る鯨

- ・竹内右兵衛書つけ（17世紀末頃）
辰巳の角矢倉（武具櫓）…しゃち本こ有り
大手之御門（大手門）…志やち本こ有、
天守の鯨の記載が無い
- ・御城内惣間数（明和3年、1766写）
御天守の項に、鯨高共六尺八寸（約206cm）

3. 絵図資料に見る鯨

- ・鯨の表現は、尾鰭などを表した複数の突起が描いてあり区別できる。
- ・天守、武具櫓、大手門は大概描かれている。
- ・一部の絵図に本丸・祈祷櫓や脇虎口之門（北惣門）にも表現されている。時期によっては変更があったのか？

4. 天守に取り付けられていた鯨（天守地下1階に保管・展示）

木造銅板貼鯨 1対

昭和25～30年度の大修理の時、修理後再使用が可能かどうか、銅板をはずして木部を点検した結果、腐朽著しく再使用出来ないとの結論となった。そこで、同形同大

の新調品を作成して大棟両端に組みこんだ。元の鯨は、大雑把に戻して保管・展示してきた。近年の調査で内部の木部から分銅印に「富」の刻印を打ち付けた木材が再発見されている。

総高210cm、底面長さ110cm、頭部幅47.2cm、頭部高さ44.6cm。

頭部は横方向に複数の角材を、胴部は縦方向に複数の角材を束ねている。その表面に目、鼻、口唇部や鰓、鱗、鰭を彫刻し、その上を複数の銅板を少しずつ重ねながら釘で打ち留めている。さらに胴部に別造りの鰭を装着し、背部に5本、腹部に3本の木造の棘をトタン板で筒状に覆い作り差し込む。尾鰭は背部に3段、腹部に5段の段を設ける。

銅板は頭の丸い銅釘であり、近代のもの。内部の木部は風蝕の形跡があり、元木造のままの段階があったのか。四角い釘穴もわずかに認められる。幕末まで溯る可能性がある。同類に丸岡城天守、弘前城天守例がある。瓦製が多い中、なぜこのような作り方をしたのか？

5. 伝世資料に見る鯨瓦

寄贈された鯨瓦 1対 ①

長らく庭の一角にあった。松江城にあったという言い伝え。祖先が足輕、廃城時に記念に持ち帰ったものか？高さ105.2cm（約3尺5寸）、寸胴である。胴部の鱗はヘラによる手描きで、大きさに太さがある。別造りの鰭を胴部にはめ込む大小の円孔が2か所にある。背部と腹部に3本ずつの棘を表す。眼球は起伏のある環で表す。口唇部は横方向に長い。別造りの鰭の完形品が3点、柄部分が1片ある。

史跡小泉八雲旧居南庭の鯨瓦 ②

復元高さ96cm（現存高82.4cm、分割成形式、鱗は手描き、口唇部の下部は省略か？ハーンは「日本の庭」で石造の鯨として紹介。 根岸家の伝えでは廃城の折り、松江城の鯨を手に入れ、庭に据えたという。

個人蔵の鯨瓦 ③…

高さ99cm、一体型、目の表現、鱗は胴部との間に隙間があり1枚ずつ接着したか？鰭を差し込む円孔は突出している。松江城関係の鯨瓦とは異なる点が多い。廣瀬方面から譲っていただいたと聞いているとのこと。

6. 城内の考古資料に見る鯨瓦

鯨瓦 ④

本丸・弓櫓跡西側多門跡から出土…右側の口唇部の破片、11本の牙、手描きの鱗、眼が付く。①に似ている。

鯨瓦 ⑤

二之丸・中櫓跡周辺出土…口唇部の破片で、牙、口髭を表現する。

鯨瓦 ⑥

二之丸・太鼓櫓跡出土…胸鰭

鯨瓦 ⑦

大手門跡取付石垣上出土…尾鰭、胴部、胸鰭 計6点。ヘラで磨いた丁寧な仕上げ。光沢あり。総高1mを超えるもの。

鯨瓦 ⑧

北惣門橋跡橋下から出土…胴部の破片。手描きの鱗文。光沢あり。

7. 特 徴

- ・上下接合式で製作・焼成したものが多い。
- ・鱗はヘラの手描きで、大小を描き分けて立体感を表す。型押しなのは無い。
- ・鰭を差し込む穴は丸い。他城（例：浜田城跡、和歌山城）では四角いほぞと柄穴。
- ・馬溜から入城すると、天守、武具櫓、手前に大手門がほぼ重なって見える。これらの城郭建造物だけにひと際大きな鯨が見えたはずである。鯨は登城したものを威圧・圧倒したのであろう。

■鬼瓦について

1. 鬼瓦とは

- ・飛鳥～白鳳期 斑鳩寺（創建法隆寺）7世紀前半 蓮華紋鬼瓦 仏堂を荘厳する
- ・白鳳・奈良時代 獣身紋鬼瓦から鬼面紋鬼瓦へ 平城宮 8世紀第2四半期以降 火災、落雷、水害などの脅威から建造物を守護する 物の怪、怨霊、鬼神のなせる業 辟邪の観念 『出雲国風土記』大原郡阿用郷の条 「…目一つの鬼来て、佃人の男を食へり…」 風土記記載の寺院跡や国分寺跡で出土。
- ・中世 寺院 不詳 荘成町・成相寺の鬼瓦
- ・近世 新たに城郭建造物に付く。富田城跡 松江城

2. 天守の伝世資料に見る鬼瓦

天守の鬼瓦は22面あり、内11面は昭和の大修理の際、破損著しく取り換えられた。残りの11面は再使用された。（修理報告書に拠る）

①から④は長らく天守に保管・展示してあったもので、現在は①、②、④、⑤は松江歴史館保管、③は天守保管・展示、⑥は寄贈品、埋文収蔵庫保管である。

鬼瓦 ①

台は平面が縦25.3cm、横（上）26.6（下）33.5cm、高さ（上）5.9cm、（下）6.9cmの箱作りで、その上に鬼面を表現する。箱の内面に把手を付ける。頭髪や顎髭はヘラで左右にかき分ける。角は頭部の上端部に付く。長さ6cm、基部幅3cm

ほどの短かいもの。頭部の端に「菊に一」の刻印あり。18世紀後半以降のもの。

鬼瓦 ②

台は平面が縦33.5cm、横（下）30cm、高さ9cmの箱作りで、その上に鬼面を表現する。箱の内面中央に強化のため粘土板が貼り付けられ円孔が3個開けられている。眼球は突き出ている。鼻は団子鼻。角はない。

鬼瓦 ③

台は縦41cm、横（上）32.5cm、高さ残存6.5cmの箱作りである。箱の内面中央に円孔のある把手が付く。鬼面は縦48cm、横41cmで最大のもの。口が大きく開きいかにも怖そうな顔付きである。

鬼瓦 ④

上部と下部に分かれており、別個体と思われる。台は横31.8cm、高さ10.5～11.0cmの箱作りである。眼球に緑色、その周囲に茶色、その他全体的に墨で黒く塗られており極めて珍しい。高さ4～5cmの小さな角を付ける。眉毛は4つに捻じれた形状で珍しい。

鬼瓦 ⑤

台は縦39.2cm、横33.5cm、高さ11.5cmの箱作りである。鬼面は台一杯に表現し、眼球の横にあるのは耳で、角はない。

3. 城内の考古資料に見る鬼瓦（一部）

鬼瓦 ⑥

外曲輪（二之丸下ノ段）・米蔵跡出土…台作りで、眼球の黒目部分は削り抜く。側面に耳を付け、眉毛は3筋で表現する。

鬼瓦 ⑦

本丸・弓櫓跡西出土…下顎部分。口唇部は鋭い牙を2本付け、渦巻状の顎髭を付ける。

4. 特 徴

- ①他城では板作りだが、松江城例は箱作りである。高さ6～11cm。
- ②大半は角が無い。角があるものは控えめである。（天守北東角、鬼門の方向に多い?）。
- ③彩色を施したものがある。目が緑色、周囲が赤色、その他が墨で黒く塗られる。
→広島城三の丸跡出土の鯨瓦の口部分に朱漆が塗られていた。
- ④他城では鬼瓦の頭頂部と鳥衾瓦の顎部の段が組み合わされるが、松江城天守例は基礎部は接合するが上部は遊離している。

■問題点

- (1) 天守の鯨は、当初の姿は何だったのか、なぜ木造の銅板貼としたのか？
⇒本格的な解体調査が必要である。
- (2) 鯨瓦は、他城の模倣をあまりせず、松江城独自の形状である。
⇒製作地はどこか。堀尾期の絵図に記載の「瓦焼」の場所か？
- (3) 鬼瓦は、全て箱作りで角の有無や鳥衾（瓦）との独特の組み合わせに特徴がある。
⇒どういう系譜か？はたまた独自の発想か？他城と比較検討する必要がある。
- (4) 鯨（瓦）や鬼瓦は、江戸時代以来ずっと松江城を守ってきた神獣たちである。
⇒松江城を今に残した真の立役者とでも言うべき存在である。
- (5) 調査・研究は、昭和の大修理時の囑託の須田主殿の情熱に拠るところが大きい。
⇒当時の膨大な歴史情報を、可能な限り展示・公開すべきである。

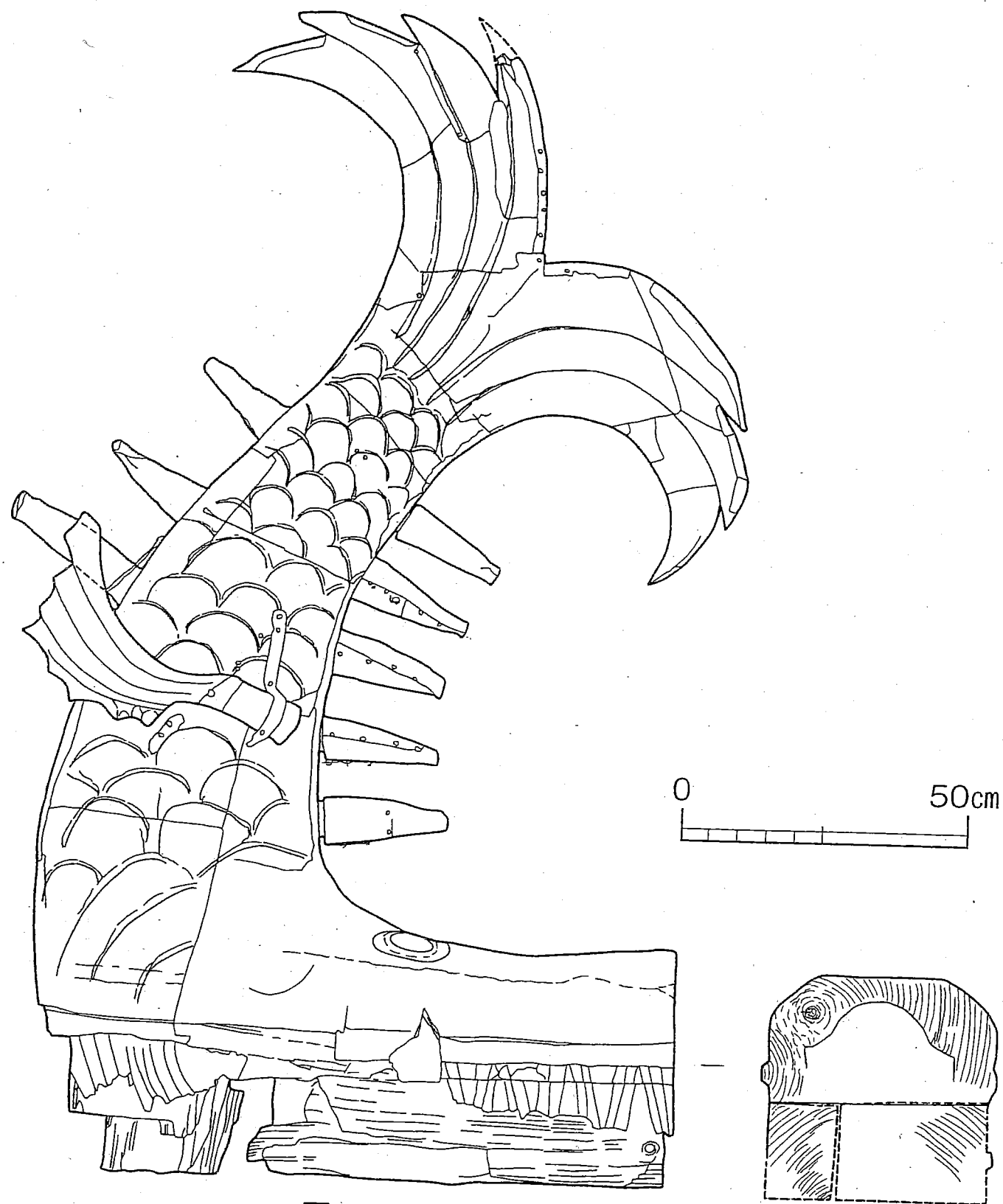
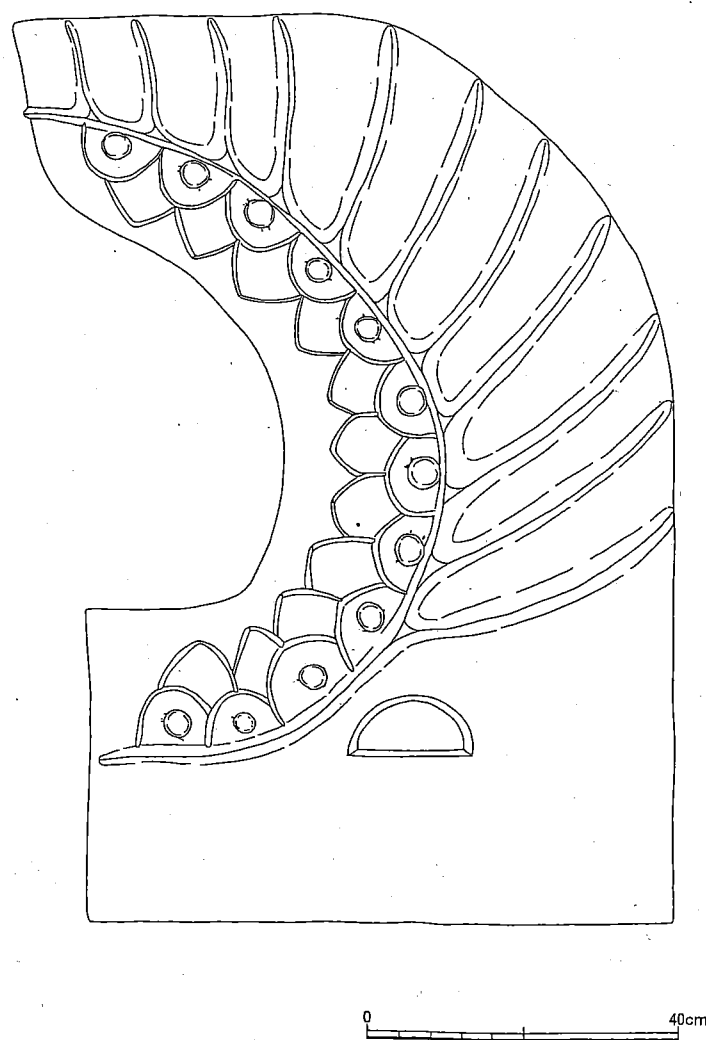


図12-8 左側の鯨 実測図

木造銅板貼鯨 1対の内

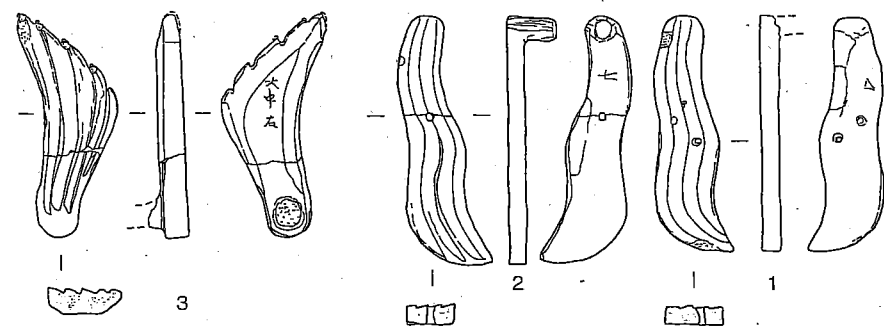


図12-12 瓦1・2 実測図

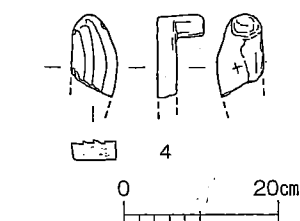
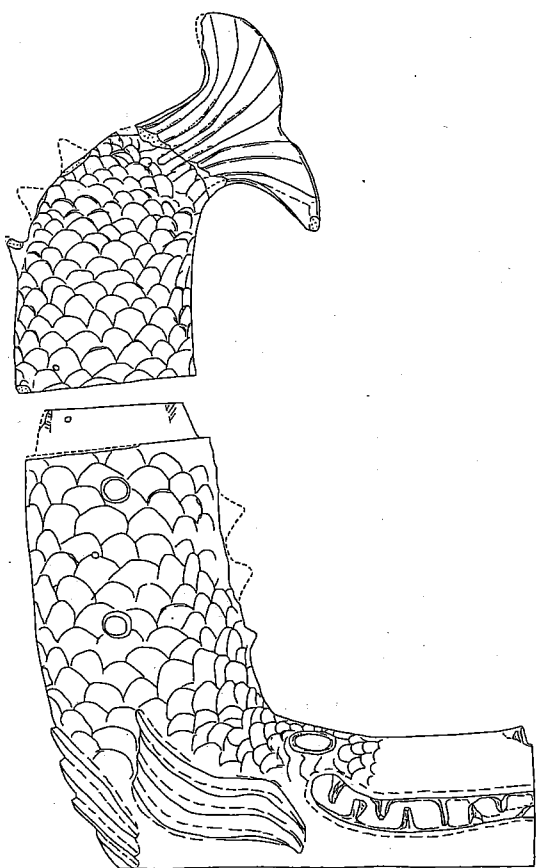
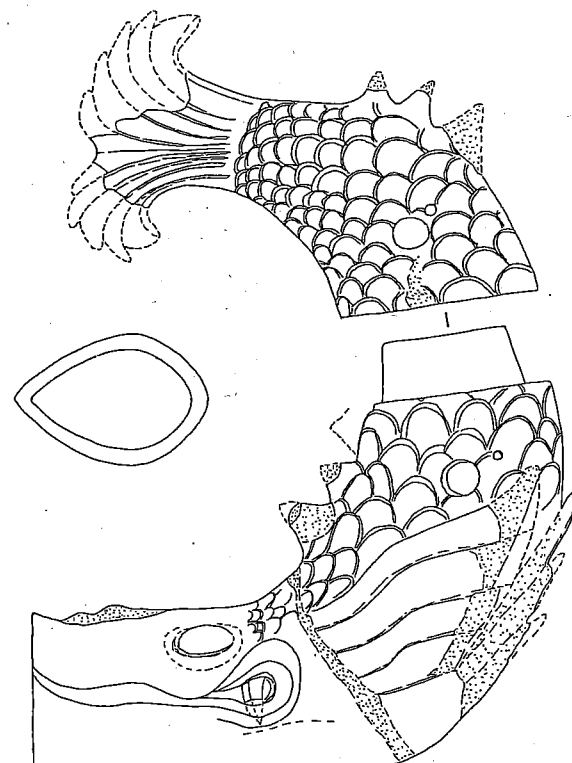


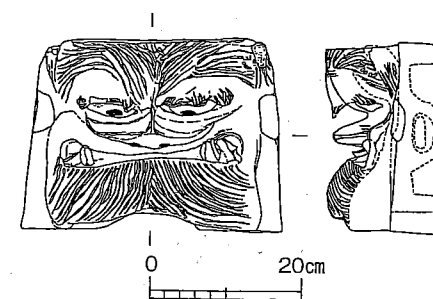
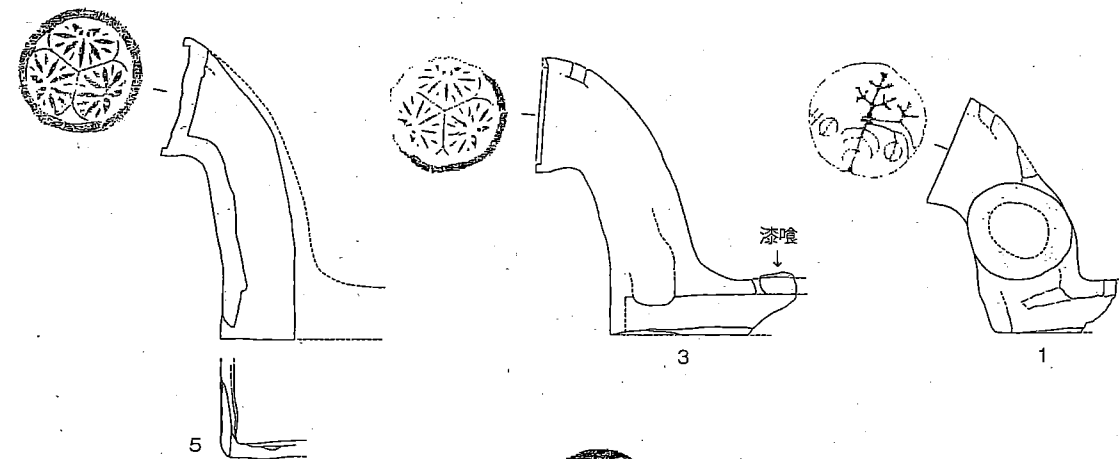
図12-13 瓦3・4 実測図



寄贈された鯉瓦 1対の内 ①



史跡小泉八雲旧居南庭の鯉瓦 ②



鬼瓦 ①

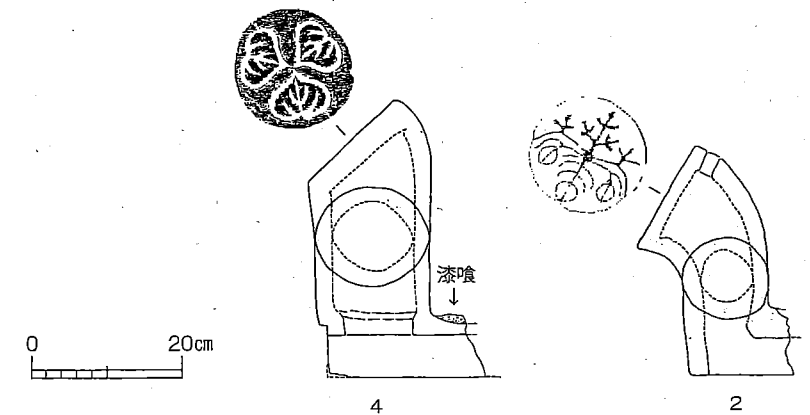
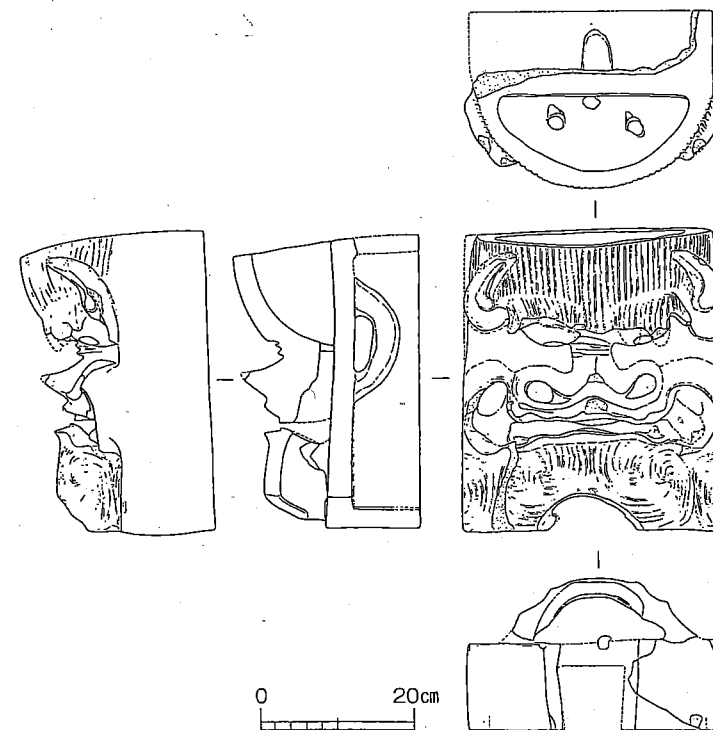
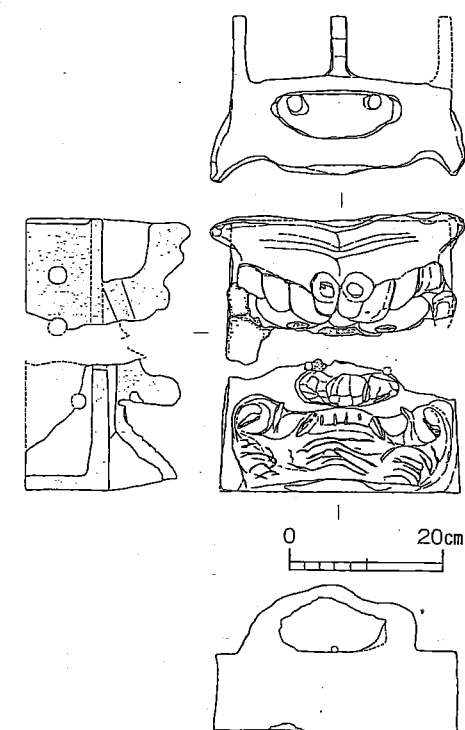


図12-18 鳥衾瓦 1～5実測図



鬼瓦 ⑤



鬼瓦 ④